

内田 留里子さんとの友情

第十五回生（昭和八年卒）

垣花 秀武

私の親しい友人達は、垣花君はフェミニストであるという。

その理由の一つは、小学校で秀才内田留里子さんと出会ったことにある。内田さんとは小学校の同クラスで机をならべていた。

当時としてはかなり進んだ小学校で、男女組がありその上男子生徒中一番の男児と女子生徒中一番の女児が隣り合って座り、二番は二番、三番は三番と以下順にビリまで及ぶというかわった習慣があった。内田留里子さんはいつも女児の一番で、私も一番のことが多かったので、自然のなりゆきで私達は殆んど常に机をならべていたわけである。

その後、声楽家として内田さんはウィーンで音楽学の勉強をしていた。私はパリで研究発表をする道すがら、三十年ぶりにウィーンで内田さんと出あうことにした。ウィーンの一流のレストランで昼食を一緒にたべ、その後、美しいウィーンの街を歩み、古い教会の硬い椅子に二人で昔の子供時代にかえって隣り合って座った。その教会で絵葉書を買ひ、あの男女組担任の仲勝一先生に寄せ書をかいた。敗戦の混乱で、先生の現住所を私達は知らなかったが、内田さんはさすがに秀才で、先生の本籍地を記憶しており、それをさらさらと書いた。

内田さんがやろうとしている音楽学のねらいもその時わかった。古くから歌われ、奏でられている日本の音楽をその起源にまでさかのぼって分析しようというのである。その手はじめとして、田植え歌がどこからきたのかたずねて数年前から録音機をかついで各所を歩き廻り、とうとう、タイ国の北方の山奥に、日本の田植え歌の源を見いだしたということなのである。

東京に帰って、私は別にたのまれたわけではないが、ある財団を動かして、内田さんの地味ではあるが新鮮な研究にながしかの研究費をさしむけることとした。又その後、内田さんが沖繩の芸大で音楽学科の設立に努力をしておられるのをきき、那覇で内田さんを経済界の方々に紹介し、内田さんのラオスの音楽研究に八百万円程集めることに成功した。

内田さんは私のこのような好意に感謝していらしく、或る日、突然、あなたが死んだら弟子の会の人をつれて追悼の歌をうたうといってくれた。それが内田さんが先に死んでしまい、内田さんのお葬式で、私がるりの会の追悼の歌をきくはめになった。

私は、能力ある女性を見出し、援助しつつづけるつもりである。それが内田さんとの小学校時代以来の長年の友情と愛情のあかしである。

